

霞

— 2007年度冬季展示室だより — 土浦市立博物館

平成20年1月5日発行 (通巻第2号)

土浦市立博物館では春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに実物資料の展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の展示資料の見どころをご紹介、解説するものです。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(2)・・・1
- 【2007年度冬季の展示資料解説】
- 信太郡中家郷の調布 模造品(古代)・・・2
- 重要文化財「絹本著色復庵和尚像自賛」
(中世)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 政直数寄屋図 レプリカ(大名土屋家の文化
コーナー)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 江戸時代の日記にみる「節句」(近世)・・・5
- 第一恩物 六球法(近代)・・・・・・・・・・・・6
- 市史編さんだより・・・・・・・・・・・・7
- 「霞」短言 暮らしのなかのはたおり・・・8

古写真・絵葉書にみる土浦(2) 絵葉書「土浦櫻川の桜」昭和初期



土浦櫻川の櫻

道を影の花く行き移てし下上を堤長に舟、所名新の花ふ負に名の川櫻
るあで情風の入一、てれ流に水り映に花が灯の百幾は夜、くよもふ

川岸や土手には、ぼんぼりがたち並び、水面には船がゆったりと浮かんでいます。桜川でのお花見風景です。桜川堤には、明治時代の終わり頃から記念事業などで桜が植樹され、やがて美しい桜並木となりました。絵葉書には次の解説があります。「櫻川の名に負(お)ふ花の新名所、舟に長堤を上下して移り行く花の影を追ふもよく、夜は幾百の灯が花に映り水に流れて、一入(ひとしお)の風情である」。貸しボートや屋形船、観桜汽船などからは、夜桜も楽しめました。桜川の桜は、土浦を代表する観光名所となっていたようです(詳しくは第29回企画展「土浦桜物語」のなかでご紹介いたします)。「土浦櫻川の桜」の絵葉書は、情報ライブラリーで閲覧できます。 【検索キーワード「桜川の桜」】

博物館からのお知らせ

第3回 土浦の雛まつり

会期 2月16日(土)~3月3日(月) ※3/3博物館は臨時開館
まちかど蔵と中城通り周辺、亀城プラザ、上高津貝塚などを会場に雛人形を展示。
博物館では江戸時代後期の古今雛こきんびなをご覧ください(展示室3)。

「わたからもめんへ」

はたおり教室・むいむい系紡ぎの会・綿の実 手織り展
会期 3月1日(土)~9日(日) 会場 展示ホール・視聴覚ホール
農家のおばあさんに習った「暮らしのなかのはたおり」にふれる作品展です。

第29回企画展「土浦桜物語」

—サクラに読みとく土浦近代史—
会期 3月22日(土)~5月6日(火) 会場 展示室2・展示ホール他
日本人は多様な思いや記憶を「サクラ」に託してきました。この展覧会では市の花「桜」とそれを見つめる人々の視線を通して、土浦の近代史をたどるものです。

館長講座 参加者募集!

- 第1回 1月20日(日)
「常陸の古代布」
- 第2回 2月17日(日)
「縄文時代の貝塚文化」
- 第3回 3月16日(日)
「なぜ校庭に桜(真鍋の桜の由来)」
- 時間 午後2時~3時30分
- 講師 茂木雅博 館長
- 定員 50人(先着順)
- 申込方法 電話(029-824-2928)で
- 対象 原則全3回受講できる方

信太郡中家郷の調布(模造品)

—都に運ばれた特産品—

大宝元(701)年、中国の唐に倣って律令と呼ばれる法体系が整備され、日本でも中央集権国家の形が整えられます。これによって、平城京(奈良県奈良市)がおかれ、この都を中心に全国は道・国・郡・里(のちに郷)の行政単位に分けられました。奈良時代の農民の主な税として、租・庸・調があります。このうち租は収穫した稲の3%を、庸は都での労働の代わりとしての布地を、調は地方の特産物をそれぞれ納めるものでした。

「中家郷の調布」は、奈良時代の天平勝宝6(754、ただし勝宝6は、4や8とも読める)年に、信太郡中家郷の住人であった大伴部羊が特産物の麻布を調として都に納めたものです。布の右端上に「常陸国 信太郡中家郷戸主大伴部羊調 壹端」、下端には「天平寶勝(勝寶の誤り)口(六カ)年十月」と墨で記されています。また、この墨書銘の上端部には、「常陸国印」とみられる方形の朱印が押されています。この麻布は奈良の法隆寺に伝わるもので、「葡萄唐草文錦褥」(国指定重要文化財)とよばれる絹織物でつくった敷き物の芯に使われていました。明治時代に法隆寺から天皇家に献納され、戦後になって国に移管され、現在は東京国立博物館に所蔵されています。

常陸国信太郡は霞ヶ浦、古代には流海と呼ばれた内海の南岸一帯に広がる地域で、平安時代に書かれた『倭名類聚抄』によると大野・高来・小野・朝夷・高田・子方・志万・中家・島津・信太・兼浜・稲敷・阿祢の13郷よりなっていました。江戸時代に中山信名が著し、土浦の色川三申が修訂した常陸国の歴史・地理書『新編常陸国誌』では、中家郷について「地図によりて推考するに、(中略)大岩田、小岩田、小松、永国、上高津、中高津、下高津、穴塚、および今の新治郡吉瀬、広岡、上室等十一村、五千九百石ばかりの地、皆古の中家郷と見えたり」と考証しており、古代の中家郷は現在の土浦市高津地区などを中心とした地域と考えられます。

調布の遺品としては、奈良東大寺の正倉院宝物がよく知られています。その墨書銘には「長四丈二尺、廣(幅)二尺四寸」(当時の一尺は、約29.67cm)と記されたものがあり、これが調布の一般的な規格であったと考えられます。調布は、さきの法隆寺のように錦褥の芯として使われたものもありますが、都で働く役人や労働者の衣服や作業着として、また藁袋や屏風袋などさまざまな布製品に使われていたようです。『茨城県史料 古代編』には、奈良時代に常陸国から貢納された調布の墨書銘が正倉院宝物を中心に、全部で16点集成されています。筑波郡1点、信太郡2点、茨城郡1点、行方郡6点、鹿島郡1点、那賀郡3点、久慈郡1点、多珂郡1点と、常陸全域から納められており、特産品としての麻布の生産がとくに常陸国南部を中心に行われていたことがわかります。

展示品は、古代の調布の規格で麻布を作製し、墨書銘の部分を原資料の写真から写して復原した模造品です。(塩谷修)



中家郷調布とその墨書銘

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を
3/22(土)午後2時から開催いたします。



重要文化財「絹本着色復庵和尚像自賛」

— 常陸の諸豪族に影響を与えた復庵の禪 —

大光禪師復庵宗己は弘安3（1280）年に生まれ、延慶3（1310）年に中国（元）に渡って浙江省天目山正宗禪寺の中峰明本（普応国師）のもとで禪の修行を積みました。帰国した復庵は、正慶元（1332）年、小田城（つくば市）から東に1里ほどの高岡楊阜庵に留まりました。また、復庵は中峰の13回忌にあたる建武2（1335）年に、楊阜庵を正受庵と名を改め、元国在住中に彫った中峰の肖像を安置して、中峰を開山第1の祖としています。さらに文和3（1354）年には、元国より中峰の分霊を迎えて、大雄山法雲寺を興しました。

復庵の出自ははっきりしていませんが、享保7（1722）年に書かれた「法雲寺雑記便覧」によると「小田治久之猶子」とあり、小田宗知の子にあたる宗儀が復庵であると考えられています。

復庵は、中峰から学んだ禪を常陸の国に広めました。復庵の教えは小田氏以外にも、佐竹・小山・結城氏などの諸豪族にも影響を与え、それぞれが復庵を招いて寺院を建立しています。中でも、小田氏に代わって勢力を広げてきた佐竹義篤は、一族の墓である清音寺（城里町）に復庵を招いて中興開山としています。また、治久の子、孝朝は義篤の娘を正室に迎えており、両家の結びつきには復庵の姿がうかがえます。

この肖像画には、黒褐色の法衣に茶色の袈裟をまとい、両手の袖口を前面に合わせて松樹の下を経を唱えながら歩く姿が描かれています。

「法雲寺雑記便覧」には「当山三世龍江善澤松下経行之像ヲ画キ賛ヲ請ク」とあり、法雲寺第3世龍江善澤和尚が復庵の肖像を画いて、賛を受けたものであると記しています。禅僧の肖像（画または彫像）を頂相といって、禅宗では師から弟子へ受け継がれるものとして、師の容姿を描いた頂相は最も尊重されました。また、頂相には師が伝法の印可（悟りを証明したもの）として画の上に賛を付与するのが一般的で、この肖像画にも復庵が善澤に授けた賛が記されています。

また、画面に向かって左下隅には「延文辛丑夏善澤捨入」の文字が書かれています。「延文辛丑」は延文6（1361）年にあたり、復庵は延文3（1358）年に没していることから、復庵が亡くなった3年後に善澤がこの掛軸を法雲寺の什物（宝物）として納めたことが分かります。

描かれた容姿から見て、この肖像画は復庵晩年の姿と思われ、穏やかな面影が感じられます。自賛の句は「雲袍錯落（うんぼうさくらく） 松庭曳履（しょうていにくつをひく） 後一千年（のちいっせんねん） 掘茯苓餌（ぶくりょうをほりてじす）」と記しています。（中澤達也）



絹本着色 復庵和尚像 自賛
重要文化財 法雲寺所蔵

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を1/26（土）午後2時から開催いたします。この肖像画は、資料保存のため2/10（日）までの展示となります。



政直数寄屋図(レプリカ)

— 雪花亭での茶会 —

土浦土屋家の二代藩主、相模守政直さがみのかみまさなお（1641～1722）の茶室の図です。「雪花亭」^{せつかてい}①という小堀遠州筆の額が掲げられていたと図に書かれていますので、この茶室を「雪花亭」と呼んでお話をすすめていきたいと思いません。

正徳2年（1712）3月22日、「雪花亭」に皆川山城守やましろうのかみら三人の旗本が客として招かれました。（第10回特別展図録『土屋家の茶の湯』所収「土屋政直茶会記」から）

客は図の右手にある「さる戸」から露地ろじに入ったと思われます。左の方に「なわずだれ」がかかった「下腹雪隠」^{したばらせつちん}（便所）があり、もう一つの「さる戸」をくぐると「コシカケ」と三畳まちあいの待合があります。ここで客は待ち合わせ、茶会が始まるまでの時を過ごしました。

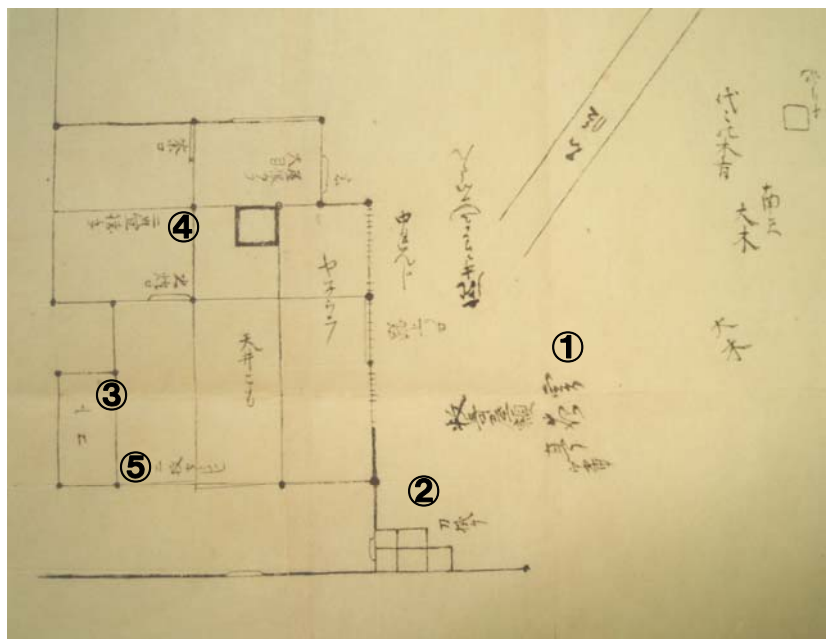
中潜りから内露地うちろじに入ります。ちょうど中潜りを抜けた右手に「利休所持梟形手水鉢」^{りきゅう ふくろうがたちょうずばち}が置かれています。梟のレリーフが四方にある手水鉢は、現在も曼殊院（京都市左京区）などに実物があります。二手に分かれる石段の両脇には松の大木が茂り、「砂雪隠」の脇には「南天」^{なんてん}の木が植えられていました。石段を左の方に進むと「雪花亭」です。

茶室の左側には「刀掛ケ」^{かたなか}②があります。ここで帯刀たいとうを解いて躡口にじりぐちから茶室に入ります。躡口を入ると正面左側に「トコ」^{よじょうだいめ}③（床）がしつらえてあります。内部は四畳台目といって、四畳の畳に点前座の台目畳てまえざ（一畳の四分の三の大きさ）が付属する五畳弱の広さでした。壁を隔てて、茶を点てる準備をする「勝手」^{かた}④二畳が続いています。この日は床せいせつに清拙せいせつという禅僧の墨跡が掛けられ、中興名物の茶入銘「面影」^{おもかげ}に高麗茶碗こうらい「有来」^{うらい}が取り合わされて茶が点てられました。床の左には「二枚せうじ（障子）」^{ちゆうこう}⑤があり、これは廊下に接していました。「雪花亭」を出て、廊下から鎖の間、書院といった広間へ向かうことができたようです。この日の客も「雪花亭」から書院に移り、別の道具で茶を喫し、会席を食した後、土屋家秘蔵の雪舟など複数の掛軸を拝見しています。得意の政直は当時珍しかったインコまで披露するサービスぶりです。

実は「雪花亭」とよく似た茶室を小堀遠州も大坂の天満屋敷内に所持していました。政直が小堀遠州ゆかりの茶道具をふんだんに用いた豪華な茶会を開いていたことはわかっていましたが、この「雪花亭」図面により、政直の遠州への憧憬しょうけいは茶室の設計にも影響していたことが明らかになりました。

このレプリカは、京都工芸繊維大学が所蔵している実物の折り目にまでこだわってレプリカをつくりました。

（木塚久仁子）



政直数寄屋図(レプリカ) (部分)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を2/2（土）午後2時から開催いたします。



江戸時代の日記にみる「節句」

— 贈り物の文化 —

3月3日はひな祭り、上巳の節句（桃の節句）です。今回は江戸時代の農家・商家の節句の様子を探ってみようと思います。

土浦地方の農家のくらしは、『図説土浦の歴史』の「土浦地方の農事暦」で知ることができます。そこで、3月3日を見てみると、「節句、使用人ひげこもち尾張大根持参」との記述が見つかります（原資料である文久4（1864）年の白鳥村名主の日記によると、どうやら名主家から200文の祝儀を送ったことに対して、贈られた家で持参したものが「ひげこもち」と「尾張大根」であったようです。「尾張大根」は愛知県の特産である大根の品種ですが、「ひげこもち」とは何でしょうか。今度は『土浦の方言』などを使って調べてみると、「ひげこ（鬚籠）」に入れた「もち」で、現在の土浦地方では「ひねこ」「ひねこもち」とも呼ばれているものと分かります。鬚籠は竹を編んで作る籠で、編み残した端が鬚のように出ていることからこの名があります。土浦地方では、現在でも上棟式などの際「ひねこ」にウラジロの葉を敷きつめて餅を入れ、お祝いに持って行くそうです。民俗学者の折口信夫は、鬚籠が鯉のぼりの柱や山車の銚の上にもつけられていた事例から、古くは神の「依代」（神霊をよせるための標識）であったと考えました。やがて、用途が忘れられて供物入れとなり、転じて贈答用の容器になったとする説です。

商家の様子はどうでしょうか。目下、刊行が進められている色川三中の日記『家事志』が年中行事をくわしく教えてくれます。文政10（1827）年3月2日の条を見ると、懇意にしている親戚、間原平右衛門家で初節句があり、三中は人形2体を調べて贈ったことが記されています。夕方、そのお礼でしょうか、間原家の使用人が白酒などを持参しました。そこで今度は、三中が間原家へお礼に出向いています。

農家・商家の日記とも、節句にあわせて贈答があったことが記されています。節句は子供の成長を祈る大切な日ですが、「贈る」「贈られる」の関係のなかで、人と人とのつながりを再認識する機会でもありました。このことは現代にも通じていますね。

今季の展示では、これらの日記とともに博物館が所蔵する江戸時代後期の古今雛を展示し、近世の土浦地方の節句をご紹介します。（萩谷良太）



江戸時代後期の古今雛



ひげこ（ひねこ）、現代

※『図説土浦の歴史』『土浦の方言』『家事志』（第1・2巻）は、参考図書コーナーで閲覧できます。販売もいたしております。

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を1/5（土）・3/1（土）午後2時から開催いたします。なお、企画展開催の関係で3/16までの展示となります。御了承ください。

第一恩物 六球法

— 土浦幼稚園に伝わる教材 —

木箱にたてられた木枠に6個の毛糸玉がつり下げられた、^{おんぶつ}恩物と呼ばれるこの遊具は、土浦幼稚園に伝わるものです。

恩物とは、ガーベ（Gabe「^{たまもの}賜」の意）の訳語で、神が児童にたまわった遊具を意味しています。ドイツの教育者で、幼稚園の創設者でもあるフリードリッヒ・フレーベル（1782～1852）が、幼稚園児の遊具として製作しました。恩物は、球、円筒、立方体、積木など、第一から第二十までの20種類から構成されています。

これは「^{だいいちおんぶつ}第一恩物 ^{ろつきゅうほう}六球法」にあたるもので、^{せきしんぞう}関信三の『^{ようちえんほうにじゅうゆうぎ}幼稚園法二十遊嬉』では次のように解説しています。



第一恩物 六球法 土浦市立土浦幼稚園所蔵

この恩物は毛糸にて造りたる六個の小球なり 其の色は則ち赤青黄の本色(ほんしょく)とならびに紫緑及び橙色の間色(かんしょく)とす 其中赤青の二色は序の如く太陽と蒼穹(そうきゅう)とに像(かたど)り黄色は則ち地球を表すなり 紫色は赤青 緑色は青黄 橙色は黄赤の二色を混合するものを云うなり

幼稚のこの恩物を玩弄(もてあそぶ)とき 各球の彩色を見別けしめ 或は其の釣紐にて之を彼處此處とやり動して前後左右上下の方向を示し 且つこの遊嬉法に依て手や腕の運動を練習せしむ ※()と下線、一部送りがなは筆者加筆

「六球法」は、色彩を見分け、ゆり動かし、手や腕の運動を練習するもののようです。それぞれの毛糸玉は太陽、^{そうきゅう}蒼穹（青空）、地球という、壮大なイメージにより製作されています。

フレーベルは、幼児の活動はすべて、形・大きさ・色・数をもつ周囲の事物と深い関連の中にあると考えました。これらの基本的な要素を認識するために考案されたのが恩物で、そのためすべて、○△□といった幾何学的な基本形と、一定の数・大きさ、色彩をもって構成されています。シンプルな形の中に、深い意味づけがされた遊具といえるでしょう。

このような教材がなぜ土浦幼稚園にあったのでしょうか。土浦幼稚園は明治18(1885)年に土浦西小学校(現土浦小学校)の附属幼稚園として開園した、茨城県では最も古い幼稚園です。その教育の模範としたのがフレーベルの幼児教育法をいち早く導入していた、日本初の幼稚園である東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園でした。土浦幼稚園児の親の多くを占めた商人の経済的豊かさ、熱心な町の有志者や教職員の存在、さらに土浦が東京に近いことが、先進的な教育を取り入れた要因であったといえましょう。

恩物をはじめとする幼稚園所蔵資料については、『土浦市史資料目録 第十七集 土浦の古文書』で目録をご紹介しますので、ぜひご覧ください。(宮本礼子)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を2/23(土)午後2時から開催いたします。なお、企画展の関係で3/16(日)までの展示となります。ご了承ください。



市史編さんだより

～～～ 土浦市史編さん事業の経緯と現況 ～～～

市史編さん事業は昭和40年10月より、「市民に親しまれ、読まれ」、「日本史の中の土浦として」、また「学術的にも価値があり」、「特色を発揮した」市史の編さんという4つの目標を掲げて始められました。これは県内でも早い時期に取り組みされた地域史編さん事業で、『土浦市史』（通史編・昭和50年刊行）、『土浦市史 民俗編』（昭和55年刊行）を含めて多くの刊行物を発刊しました。

その後新たに市に関する史料が発見され、新情報の提供もあり、また継続してきた調査結果が蓄積されたことなどから、『土浦市史』の改訂版編さんの必要性が提唱されました。そのようなことから現在では研究室を設けて資料集や資料目録などの刊行を行いながら下記のような郷土史資料の充実に努め、次期『土浦市史』編さんの準備を進めています。

(1) 色川三中日記「家事志」の解説・翻刻

幕末に薬種業や醤油醸造業を営みながら国学研究を行っていた色川三いろかわ みなか中(1801～1855)の日記「家事志」の解説と翻刻をしています。前号でご紹介しましたが、「家事志」は家業の記録にとどまらず土浦に関する様々な事柄が詳細に記されていて、非常に貴重な史料です。「家事志」は全五巻刊行の予定で、これまでに第一巻・第二巻を刊行し、現在第三巻を編集しています。

(2) 長島尉信史料の解説・翻刻

色川三中と同時期に長島尉信ながしま やすのぶ(1781～1867)という土浦藩士がいました。両者は互いに身分を超えての深い親交があり、また三中の日記を読み進めるうえでも尉信の著作を読む必要があり、相互補完的な意味から史料の解説をしています。

尉信は小田(つくば市)の名主なぬしでしたが退役後は水戸藩に召し抱えられていました。その後土浦藩に仕え、町方まちかたの地詰じづめ(土地測量)などに従事しました。このときに土浦の土地に関する様々な論考が記され、それに多くの公私の古文書類が利用されていることから町の様相を知る上でも大いに参考になっています。

(3) 古文書の整理・目録作成

市内外に残存する古文書の散逸を防ぎ保護するため、市民グループの土浦市古文書研究会の協力を得て整理作業を行っています。また、それを目録にまとめ、『土浦市史資料目録 土浦の古文書』として毎年刊行しています。この作業は20余年にわたって続けられていて、資料目録として刊行しているものだけでも17集、家文書いえもんじょとしては29家になります。古文書の詳しい解題かいだいは資料目録に譲りますが、いずれも後世に伝える必要がある貴重な史料です。

当館では所蔵者から寄贈・寄託・借用などを受け、適切な環境のもとで史料の保存に努めています。

(4) 新聞資料の土浦関係記事調査

明治24年から昭和25年までの「いはらき新聞」、昭和20年から29年までの「朝日新聞」に掲載されていた土浦関係の記事を調査し、表題と記事の要約を記録しています。この記録をデータベース化し、近代情報の充実に努めています。

情報の一部(明治の「いはらき新聞」のみ)を、2階展示ホールの情報ライブラリーで公開していますので、活用してみてください。
(深谷誠一)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は「はたおり教室」の講師の方に活動の様子をご紹介します。

「暮らしのなかの はたおり」

処分される寸前の古いはたおり道具を使い、平成2年に始まった「はたおり教室」も、今年で通算17期となりました。受講生は綿の栽培から、糸紡ぎ、土浦近辺に伝わるはたおりの技術、おばあさんたちのやりかたそのままを2年間かけて学びます。織物産地ではない地域の博物館で、このような講座が長年開かれているのはとても珍しいといえるでしょう。

蚕や綿を育て、糸に紡ぎ、布を織り、仕立てる。そんなことを、昔の農家の女性たちは、毎日の暮らしのなかで家事のひとつとして、当たり前のようにこなしていました。豊かな時代になり、今ではふだんの生活で針をもつこともほとんどなくなってしまいました。日常の衣類を素材からすべて自ら作っていた時代が、昭和30年代まであったのです。

実際にはたおりをしたことのある方たちのお話を伺うことは、年々難しくなってきましたが、道具などはまだ残されていることがあります。今年度は、市内の山ノ荘小学校に出向き、保存されていた機^{はた}を補修して糸をかけ、約50年ぶりに動かすことができました。このような報告や、織りの実践などを記録集として一冊の本にまとめ、年に一度の作品展のときには、織りあがった作品とともにご覧いただいています。

2年間の講習を終えた卒業生の多くは、その後もサークルを作って活動を続け、「綿の実」は博物館でのはたおり体験の指導、「むいむい糸紡ぎの会」は小学校校外学習の指導にあたっています。

★★はたおり教室受講生と卒業生による作品展を3月1日(土)～9日(日)まで開催いたします★★

コラム(2) —博物館と子どもたち—

11月から次の年の2月にかけて、館内には校外学習の子どもたちの声がかぎります。市内はもちろん、近隣市町村からも、小学4年生の「昔の暮らし」という単元に合わせた来館です。

一番人気は「はたおり」です。はたおり教室卒業生「むいむい糸紡ぎの会」の皆さんのご協力、綿の種とり・糸紡ぎ・はたおりを体験します。綿切りろくろでの、綿と種を分ける作業は子ども達のお気に入り。没頭している様子は楽しげで、昔は子ども達の仕事だったというのもうなずけます。

洗たく・アイロン・灯りの道具などは、学芸員が解説。行灯^{あんどん}の明るさ体験では「思ったより明るいね」「きれい」「暗い、本も読めないよ!」と、さまざまな感想がとびだします。「昔は不便だった」で終わらないように…と話をしますが、果たしてうまく伝わっているのでしょうか。

子ども達の反応は素直です。まだ歴史を学んでいないため、難しいかと思いきや、意外にも興味しんしん。するどい質問があることも。多くの子ども達にとって、「博物館」とはじめて出会うこの機会。またいつてみたいなど思える場になってほしいと思っています。(宮本礼子)

情報ライブラリー更新状況

【2008・1・5現在の登録数】

古写真 321点(+124)

絵葉書 197点(+59)

※()内は2007年10月2日時点との比較です。

※展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新いたしております。1ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2007年度
冬季展示室だより(通巻第2号)
編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928

次回展示(2008年度春季)は2008年4月1日(火)からご覧いただけます。「霞」2008年度春季展示室だより(通巻第3号)は4月1日発行予定です。次回のご来館をおまちいたしております。